

令和2年度

拓殖大学第一高等学校入学試験問題

一般 I 《国 語》



注意事項

- 1 この科目の解答時間は50分間です。
- 2 開始の合図があるまでは問題用紙を開かないこと。
- 3 落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所がある場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
- 4 解答は必ず解答用紙の指定欄に記入すること。
- 5 本文からの抜き出し問題および記述問題については、句読点やかっこもそれぞれ一字に数えます。
- 6 受験中は鉛筆、シャープペンシル、消しゴム、受験票以外は机上に置かないこと。
*下敷きの使用は禁じます。
- 7 終了の合図と共に筆記用具を置き、監督者の指示に従うこと。

受験 番号	
----------	--

一 次の各問いに答えよ。

問一 次の傍線部と同じ漢字を含むものを一つ選び、それぞれ記号で答えよ。

- | | | |
|--------------|----------|----------------|
| ① オゴソかに執り行う。 | ② タスサえる。 | ③ ジユウオウムジンの活躍。 |
| ア セイジャク | ア 家庭ホウモン | ア 道路がジュウタイする。 |
| イ ゲンシユク | イ ケイタイ電話 | イ ジユウセキを担う。 |
| ウ ゼツミヨウ | ウ 師弟カンケイ | ウ 機械をソウジュウする。 |
| エ ソンケイ | エ レンゾク小説 | エ 欠員をホジュウする。 |

問二 次の傍線部の読みを答えよ。

- ④ 早合点してミスする。
- ⑤ 表象としての日本文化。
- ⑥ 人との出会いはまさに一期一会だ。
- ⑦ 震災からの復興。
- ⑧ 下手投げで負けた。

問三 例を参考に、次の傍線部の言葉と同じ意味を含む熟語を一つ選び、それぞれ記号で答えよ。

例 アシ跡をつける。

- ア 不ソク イ 満ソク ウ 補ソク エ 蛇ソク
- ↓「あし」という意味を持つのは「蛇足」なので解答はエ

⑨ ショウ女から大人になる。

- ア ショウ量を使う。
- イ ショウ佐
- ウ 多シヨウなりとも
- エ 年シヨウ者

⑩ 力度な負担がかかる。

- ア 力労
- イ 看力
- ウ 通力儀礼
- エ 力失

① 大切な何かを失ったあと、一般的に「立ち直る」ことがよしとされ、まわりの人も早く立ち直ってもらいたいと願う。では、「立ち直る」とはいったい何を意味しているのだろうか。

『日本国語大辞典』第二版では、①倒れたり倒れそうになったりしているものが、もとどおりしっかりと立つ、②悪い状態になった物事が、もとのよい状態になる、等々と記されている。

a 失恋のショックから「立ち直る」といえば、失恋によって落ち込んだ状態から脱し、普段の精神状態に戻ることだと考えられる。

b 実際には、時間が逆戻りし、大切な何かを失ったという出来事そのものをなかったことにして、喪失以前と同じ状態に戻るわけではない。

死別の場合、亡き人が生き返らない限り、死別以前とまったく同一の状態に戻ることはない。遺族にとっては、いくら時間が過ぎようとも、亡き人の面影や思い出がすべて消え去ることもない。悲しみから離れられる時間は増えていくが、日常のなにげないきっかけで亡き人のことが思い出され、涙が思いがけずあふれてくることもある。

c、大切な人の死によって取り巻く状況は変わり、そして遺族自身も変化している。失恋であれば、相手と復縁する可能性はあるが、復縁したとしても失恋したという事実が消えるわけではない。私たちは重大な喪失によって何らかの影響を受けており、喪失前の自分とまったく同じ自分にはなりえない。

「立ち直る」ということは、あたかも風邪が治り、本来の健康状態を取り戻すかのような印象があるが、何事もなかったかのごとく喪失体験を消し去ることはできない。私たちができるのは、喪失から回復し、以前の状態に戻るのではなく、大切な何かを失った状況のなかで生きることである。

「適応」という考え方は本来、生物学の概念であり、生物が生活環境に応じて、生存に適するように形態や習性を変化させていく過程であるとされる。心理学では、環境からの要請と個人の欲求がともに満たされ、環境と個人との間に調和した関係が保たれている状態を指し、学校への適応、職場への適応、海外生活への適応なども表現される。

喪失への適応を旅にたとえるならば、目的地は喪失前と同じ場所ではない。一人ひとりが異なる風景を見ながら、決して平坦ではない道のりにおいて、自分のペースで旅を続け、やがて以前とは違う新しい場所にたどり着くのである。

喪失に適応するためには、失った事実を受けとめ、自分の気持ちや直面している困難と折り合いをつけていくことが必要である。拭いきれぬ思いをいかに消し去るのが大事のではなく、その思いを抱えつつも、自分なりにどのように生きるのが重要である。

一方で、喪失への適応は、当事者本人の問題と矮小化されるべきではない。当事者を取り巻く人々や環境によって、適応が促されることもあれば、阻害されることもある。たとえば、中途障害者の場合には、利用しにくい設備や制度、慣習や偏見など思いもよらぬ社会的障壁によって、生きづらさを感じることもあるかもしれない。喪失とともに生きる人の困難を増幅させない社会の姿勢も問われている。

(中略)

重大な喪失を経験した者同士がそれぞれの体験や気持ちを語り、分かち合うことを通して、「自分だけがこんなに悲しいのではない」ということをしばしば実感できる。「分かち合えば喜びは2倍になり、悲しみは半分になる」という海外のことわざがあるが、分かち合うことで、悲しみだけでなく、喪失にともなう複雑な感情が解かれ、やり場のない気持ちが少しでも軽くなるかもしれない。

このような機会を提供する場として、「セルフヘルプ・グループ」とよばれる活動がある。セルフヘルプ・グループとは当事者組織であり、同じ悩みや障害のある人たちによって作られた小グループのことをいう。その目的は自分が抱えている問題を仲間のサポートを受けながら、自分で解決あるいは受容していくことにある。病気や障害のある人たち、アルコール依存や薬物依存などの嗜癖のある人たち、犯罪や虐待などの被害者たち、不登校や引きこもりの人たちなど、多様なグループがあり、当事者だけでなく、その家族のためのグループもある。死別体験者のセルフヘルプ・グループの活動は1960年代に英国や米国で始まり、日本

で本格化し始めたのは1990年前後であるといわれる。

こうしたグループには「グループで話されたことはグループ内にとどめる」「求められない限りアドバイスは与えない」などの基本ルールがあり、ファシリテーターと呼ばれる担当者が司会進行役となって対話を進めていく。普段の生活では話せないことも安心して話せる場であることが重視されており、「この会に来て、^③初めて泣けた」という人も多い。「自分と同じような体験をした人の話を聞いてみたい」「自分の話をきいてもらいたい」という人は、ホームページを開設している団体も多いので自分で探してみてもいいし、各自治体の精神保健福祉センターや保健所などに問い合わせるのもいいだろう。

1999年に設立された「小さないのち」は、子どもを亡くした父母と家族のセルフヘルプ・グループであり、子どもの「いのち」について語り合いながら、この先の人生に意味を見出すことを会の目的としている。会の代表である坂下裕子氏は、活動の一端として、参加者とともに死別による^④グリーフを図に描いてみるという試みが続けている。経験は千差万別だが、参加者同士で「そうそう」「あるある」と共通する部分も多く、図にすることで体験を共有しやすくなると坂下氏は考えている。

私は大学の講義で、坂下氏をゲストスピーカーとして毎年招いている。そのなかで、インフルエンザ脳症で1歳の娘さんを亡くしたご自身の体験とともに、会の参加者によって描かれたグリーフの図について話してくださった。その図を坂下氏の解説とともにいくつか紹介したい（便宜上、実際の図をもとに描きなおしたものを掲載）。

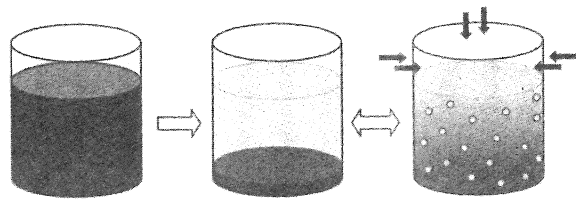


図1 グリーフを水の濁り具合で表現している

・図1 「悲しみは消えてなくなることはない」

死別後の胸中を、水の入った^⑤コップにたとえている。左のコップは濁った水（激しいグリーフ）で満たされている。真ん中のコップは、時間の経過にもなつてグリーフは沈澱し、透んだ水に変化したことが示されている。このとき、自分が回復したことを感じる。ところが、何かのきっかけによって、コ

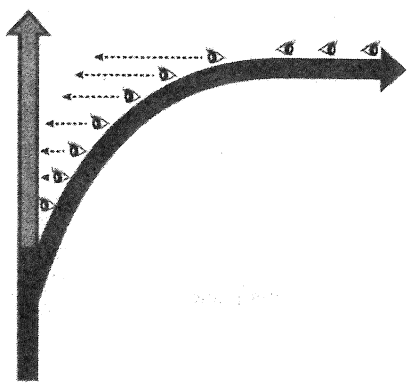


図2 亡き子が生きていたはずの「もう一つの道」の表現

・図2 「はずだった」道ばかり見つめた

X

この図を描いた遺族は、本当の道はこちらの道だと考えられるようになり、実際に歩いている道を見つめるようになった。その時期が、死を受けとめたときだったのかもしれないと語っている。

ツプは揺さぶられ、一気に濁った水に戻る様子を右のコップは示している。この図を描いた遺族は、「悲しみは底に沈んでいるだけ。消えてなくなることはない」と話したという。これが、多くの遺族の実感なのかもしれない。

・図3 傷の比率が変わる

お子さんを亡くした父親が自分自身を^⑥ボールにたとえた図である。左端は独身だった頃のボールの大きさで、結婚して一回り膨らみ、子どもが生まれてもう一回り膨らんだ。2人目の子どもが生まれると、さらに膨らんだ。ところがその子が亡くなり、自分も心が大怪我をして、自分の半分をもぎ取られたように感じた。数年後、心の怪我の炎症は治まったものの、もぎ取られた傷口はふさがることなく、そのままであった。ただ、体が半分もぎ取られたままでは生きていけないので、仕事に打ち込んだり、やりがいのあることを見出したり、家族を幸せにしたり、誰かの役に立ったりなど、色々な方法で本体のほうを大きくする努力が必要だったという。この図を描いた遺族は、そうして器を大きくすれば傷口の比率は小さくなっていき、生きやすくなると語られた。

坂下氏によると、人によって描く図は本当にさまざまで、同じ人の絵も変わっていくことがあるという。つまり、当事者の思いは一樣ではなく、同じ人のなかでも、その様相は変化していくものであることが示唆される。こうしたみずからの喪失体験を図で表現することや、それをもとに体験を共有することは、自分と向き合い、気持ちを整理する機会となりうるだろう。

問一 空欄 a c に入る接続詞の組み合わせとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア a だから b しかし c たとえば
イ a だから b つまり c また
ウ a つまり b だから c さらに
エ a たとえば b つまり c さらに
オ a たとえば b しかし c また

問二 文中において、次の一文がある段落の末尾から削除されている。削除された一文を挿入すべき箇所の直前の十字を抜き出して答えよ。

すなわち、喪失から「立ち直る」、あるいは喪失からの「回復」ではなく、喪失への「適応」が求められる。

問三 傍線部①「大切な何かを失ったあと」、筆者はどうすべきだと考えているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 周囲からの期待に応えるためにも、時間をかけて喪失から「立ち直る」べきである。
イ 喪失前の生活への回帰を目標として、現実への「適応」を模索していくべきである。
ウ 何事もなかったように喪失体験を消去し、本来の状態へ切り替えていくべきである。

- エ 喪失の事実を受け止め、喪失とともに生きていくことを受け入れていくべきである。
オ 喪失状態からいち早く抜け出し、もとのよい状態への「回復」を目指すべきである。

問四 傍線部②「喪失以前と同じ状態に戻る」と対義的な内容を述べている箇所を文中から十七字で抜き出し、最初と最後の五字を答えよ。

問五 傍線部③「初めて泣けた」人が多かったのはなぜか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 今までやり場のない気持ちを抱えて生活してきたが、仲間からの支援を感じることで場への信頼感が生まれ、抑圧された感情を解放することができたから。
イ これまで喪失体験に長らく悩まされてきたが、重大な喪失を解決することができたという達成感から、感動が涙となってしまうことが多かったから。
ウ これまで楽観的に物事をとらえるようになってきたが、場の雰囲気によって悲哀の念が誘導され、人生で初めての感覚を体験することができたから。
エ 今まで感情を表現することがうまくできていなかったが、仲間に体験を打ち明けることで辛い過去から解放され、喜びのあまり感情が溢れたから。
オ これまで人の話に耳を傾けることがなかったが、自分と同じ体験をした人の話を聞くことで、その時の体験が思い出され感情的になったから。

問六 傍線部④「グリーフ」の言葉の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア 体験 イ 凶解 ウ 怒気 エ 喪失 オ 悲嘆

問七 傍線部⑤「コップにたとえている」とあるが、このように図示することの効果の説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア グリーフを共有することで、喪失状態に陥ったときの実感を知らせることができる。
- イ グリーフを表現することで、喪失状態が解消され、気持ちを整理することができる。
- ウ グリーフを共有することで、多角的な解釈を獲得し、事実と向き合うことができる。
- エ グリーフを解放していくことで、一時的に喪失状態の回復を感じることができる。
- オ グリーフを説明することで、自らの喪失体験を客観視し、受容することができる。


問八 空欄

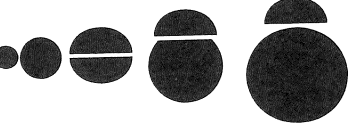
X

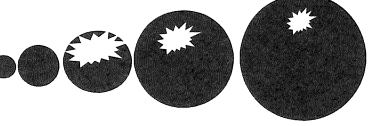
に当てはまるように次の選択肢を並び替え、一番目から順に記号で答えよ。

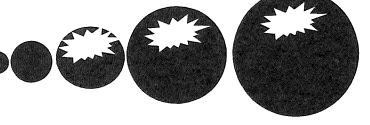
- ア その後、残された親は、今歩いている道は見ずに、「はずだった道」を見つめ続ける。
- イ 「本当なら今頃は〇〇なのに」などと考え続ける。
- ウ 亡き子と一緒に生きていく「はずだった道」は、死別を境に絶たれて、右に大きくカーブする道に追いやられた。
- エ けれども年数とともに、だんだん見通しがきかなくなり、「本当なら」という言葉も減っていく。

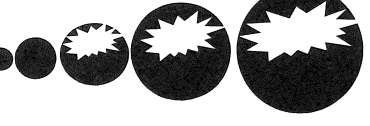
問九 傍線部⑥「ボールにたとえた図」を簡易化したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 

イ 

ウ 

エ 

オ 

問十 次の選択肢の説明が筆者の考えと合致する場合は○で、合致しない場合は×で答えよ。

- 1 喪失に適応するためには、その辛い思いをいかにして拭い去るかが大切である。
- 2 喪失に適応するためには、個人だけでなく社会の在り方も問われている。
- 3 喪失体験を図示することで、相手の気持ちと向き合うことにつながる。

問十一 次の会話文は、拓大一高の先生と生徒たちが本文の内容について振り返りを行ったものである。後の問いに答えよ。

- (1) 空欄 a、b にあてはまる部分をそれぞれ指定の字数で文中から抜き出し、最初と最後の五字を答えよ。
(2) 空欄 c に当てはまる説明を指定の字数で考えよ。ただし、「喪失」と「感情」の二語を必ず用いること。

先生 「人はどのようにして『喪失』を受け入れていくのか」という問いに対して、筆者はどのように説明しているでしょうか。

生徒 筆者は、「適応」という概念を使って説明しています。

先生 その通りです。さらに、筆者はその「適応」に至るまでの条件を挙げていますね。「適応」するためには、当事者が a (四十字以内) ことと・・・?

生徒 当事者を取り巻く社会が b (二十字以内) ことが必要だと述べています。

先生 そうですね。これで前半の流れがうまくまとまりました。後半はどんな内容でしたか。

生徒 「適応」に至るまでの条件を整える一例として、「セルフヘルプ・グループ」に着目しています。

先生 そうですね。「セルフヘルプ・グループ」とは、どのような活動を行っていますか。

生徒 c (四十字以内) ことを促しています。

先生 すばらしい。授業も同じですよ。こうやって教室空間で情報を共有しあうことで、課題を整理することにつながります。

三

次のⅠ、Ⅱの文章を読んで、後の問いに答えよ。

I

昔大和の国に、男・女あひすみて、^①年来になりけれど、昼とどまりて見ることなかりければ、女の怨みて、「年来の仲間れど、いまだ容姿を見る事なし」とうらみければ、男、「うらむる所道理なり。ただし、わが容姿見では、さだめて怖ぢ恐れむがいか」と言ひければ、「このなからひ、年を数へむはいくそばくぞ。たとひ、その容姿見悪しといふとも、ただ見え給へ」と言へば、^A「しかなり。さらば、その御匣の中にをらむ。ひとり開き給へ」と言ひて帰りぬ。いつしか開けて見れば、^B蛇、^{くちなは}わだかまりて見ゆ。驚き思ひて、ふたをおほひて、のきぬ。その夜、また来たりて、「我を見て、驚き思へり。まことに道理なり。我もまた、来たらむこと恥なきにあらず」と言ひ、^B契りて、泣く泣くわかれ去りぬ。女、^②うとましながら、恋しからむ事を、嘆き思ひて、麻の、巻き集めたるをば、^{あせ}綜麻といへり。その綜麻に針をつけて、その針を、^{あせ}狩衣のしりにさしつ。夜明けぬれば、その麻をするべにて、尋ねゆきて見れば、^{あせ}三輪の明神の御神庫のうちに入れり。その麻の残りの、みわけ残りたれば、^{あせ}三輪の山とはいふなりといへり。

(『俊頼髓脳』より)

(注1) 御匣：櫛(くし)などの化粧道具を入れる箱。

(注2) わだかまりて…とぐろを巻いて。

(注3) 綜麻：紡いだ糸をつないで、環状に幾重にも巻いたもの。

(注4) 狩衣：平安時代の貴族の常用略服。

(注5) 三輪の明神：我が国最古の神社大神神社の祭神。

(注6) 御神庫：神宝を収める倉、また神社そのものもいう。

明けぬれば男帰り給ひぬ。其の後、女櫛の箱開けて油壺の中を見給ふに、壺の内に動く者あり。「何の動くぞ」と思ひて持ち上げて見給へば、極めて小さき蛇へびわだかまりて有り。油壺の内に有らむ蛇の程を思ひやるべし。女これを見給ふまに、さこそ、「おびえじ」と契りC(注7)しかども、大におびえて声を挙げて棄てて逃げ去りぬ。

其の宵、男来り。例にあらざるけしきと悪しくて、女に「事無し。女、「怪し」と思ひて寄り給へるに、男の宣はく、^④「さばかり申しし事を用給はずして、おびえ給ふ事、極めて情無き事なり。されば我、今は参り来じ」とて、いみじくはしたなげなる気色にて、^D「帰り給ふを、女、「さばかりの事によりて来じと有るこそ口惜しけれ」とて、引きかへ給ふ時に、女の前に箸をつき立てて、女即ち死に給ひぬれば、天皇・后すまひ嘆き給ふと云へども、更に甲斐無くて止みにけり。

(『今昔物語集』より)

(注7) 契り…約束し。

(注8) □: 欠字。種類・該当語ともに未詳。

(注9) 引きかへ給ふ…手をとって引きとめなさる。

問一 傍線部①「うらみければ」の理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 何年も共に過ごしながら昼の姿を見せない男に対して男の愛情を疑う気持ちが募ったから。
 イ 醜い容姿を見たら心変わりしてしまう程度の愛情であると思われているのが心外だったから。
 ウ 男の正体に薄々勘付いており、男からの告白が自身への信頼の証であると考えていたから。
 エ 昼の所在が分からない男に他の女性の存在を疑い、自身と男の間に愛情の差を感じたから。

問二 傍線部A「言へ」、B「言ひ」、C「契り」、D「帰り給ふ」の主語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- | | | | | |
|---|-----|-----|-----|-----|
| ア | A 男 | B 男 | C 女 | D 男 |
| イ | A 女 | B 女 | C 男 | D 女 |
| ウ | A 女 | B 男 | C 女 | D 男 |
| エ | A 男 | B 男 | C 女 | D 女 |

問三 傍線部②「うとましながら、恋しからむ事」に見られる女の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 正体を現さない男への不信感とこれまで共に過ごした時間で培った愛情とが入り混じった心情。
 イ 一時の感情で男を拒絶して男を傷つけてしまったことを後悔し、何とか男を取り戻そうとする心情。
 ウ 男の本体が蛇であったことへの気味の悪さと年来愛し合ったゆえの愛着との間で揺れ動く心情。
 エ 長年連れ添った男の正体が蛇であったことに失望し、恋しく思う気持ちが失われてしまった心情。

問四 傍線部③「例にあらざる気色いと悪しくて」とあるがなぜか。その理由を三十字以内で答えよ。

問五 傍線部④「さばかり申しし事(そのように申し上げたこと)」を次のようにまとめた。空欄にあてはまる男の言葉をIの文章から探して二十字前後で抜き出し、最初と最後の三字を答えよ。

□。それでも、決しておびえないでください。

問六 傍線部⑤「おびえ給ふ事」は、Iの文章でいうと女のどのような行動に該当するか。五字以内で抜き出して答えよ。

問七 IとIIの文章に関する説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア I、IIの文章ともに、男の仮の姿が蛇として描かれ、話の末尾で男の正体がIでは神であったこと、IIでは天皇であったことが明かされ、人ならざらると思われたものが実際には高貴な存在であったという典型的な説話となっている。

イ Iでは女の驚きを当然のこととして受け止め、自ら身を引く男の姿が描かれているが、IIでは女の裏切りに対して激しい怒りと拒絶を示す男の様子が対照的に表現されている。

ウ Iでは女が男に対して一貫して恋しく思う気持ちを持ち続ける様子が描かれているが、IIでは男の怒りの理不尽さに不満を覚え、男をなじる女の姿が対照的に表現されている。

エ I、IIの文章ともに、男が女の元に通う当時の婚姻形態が描かれ、女が男に対して、Iでは居場所を突き止めようとし、IIでは引き止めようと積極的な行動を起こすことが結果として不幸につながるという教訓的な説話となっている。

問八 二重傍線部「用ゐ給はずして」を全て現代仮名遣いの平仮名に直せ。

問九 『今昔物語集』は平安時代末期に成立した説話集である。異なる時代に成立した作品を次の中から選び、記号で答えよ。

ア 奥の細道 イ 枕草子 ウ 竹取物語 エ 古今和歌集